

令和2年度 生活科・総合的な学習の時間部会研究計画作成試案

研究主題の変更
「思いや願いをもって」
↓
「思いや願いの実現に向けて」
様々な思いや願いをもつ一人一人の子供が、**取り組む過程を一層重視**します。

今年度の部会における
研究のポイント

生活科
自分の生活について考え、**気付きの質を高める**子供の姿を捉える。

総合的な学習の時間
探究的な4つの学習過程における子供の姿を**的確に捉える**。

試案では、生活科における「探究」について、総合的な学習の時間の学習指導要領で用いられている意味をそのまま低学年の子供の姿として考えておりません。部会として願う子供の「探究」となっております。生活科と総合的な学習の時間における目標を踏まえつつ、子供主体の学びを目指すものとして、本年度も「探究」としてしています。

子供理解の原則に立つために、教師は、一人一人の子供に**応じた支援を絶やさな**いこと、また、**子供を丸ごと(発言、行動の意味とその背景、人となり)受け止める**構えをもちます。

1 研究主題

思いや願いの実現に向けて探究する子供の育成を目指して

2 研究主題設定の趣旨

生活科・総合的な学習の時間部会では、自ら探究する子供を育成することを目指して、本研究主題を設定した。そこで、「自分だったらどのように考えるか」と対象を自分事として捉えること、また、探究する過程で誤行錯誤しながらよりよくしようと取り組むことを大切にしたい。そのために、子供理解の原則に立ち、一人一人が思いや願いをもちながら活動に取り組めるようにしていきたい。

(1) 主題に掲げる「探究する子供」について

探究する子供＝課題解決的な活動を主体的に繰り返す子供

自分の思いや願いをもち、一つの課題の解決に向けて多様な視点から試行錯誤し、さらに新たな課題を見つけて繰り返し取り組み、学びを糧にしていける子供を育てていきたい。

① 価値ある課題を自分でできる子供に

課題解決的な活動が子供主体で継続していくためには、子供たちが本人にとって価値ある課題、つまり解決したい切実感のある課題を設定する必要がある。そのためには、対象に主体的に関わる過程で、子供の中から課題が生まれるようにしたい。

また、その課題を自分でできるようにするために、対象と働き、そして実感的に関わる中で、子供が解決したい課題を設定する場面や他者(仲間等)に説明して互いに認め合う場面を設定することも大切である。

② 「見方・考え方」を働かせる子供に

「見方・考え方」とは、各教科等における学びの過程で、どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのかということである。生活科では幼児期の総合的な学びを基とし、具体的な活動や体験を通して身近な人や・社会及び自然と自分との関わりを捉え、よりよい生活に向けて思いや願いを実現しようとする姿を大切にしたい。また、総合的な学習の時間では、生活科等各教科で身に付けた見方・考え方を総合的に働かせ、社会の多様な問題に自分事として向き合い、よりよく課題を解決し、自分の生き方を考えていくための資質・能力を育成することを目指す。

自分の課題に対して主体的に学習活動を振り返り、自分なりに納得できる答えを探し求める中で、解決の道筋がすぐには明らかにならない場合やなかなか解決できない場合もある。それでも、各教科等で身に付けた資質・能力等、もてる力を総動員して、自分の課題を多様な視点から解決しようとする子供の姿を大切にしたい。

③ 自立し生活を豊かにしたり、自己の生き方を考えたりする子供に

生活科では、子供が思いや願いを実現する過程で、自分の成長に気付いたり活動の楽しさや達成感等の手応えを感じたりする。それらを自分の学びやこれからの生活に生かすことで、自立し生活を豊かにしていく。また、総合的な学習の時間では、見方・考え方を働かせることで身に付けた資質・能力を活用し、試行錯誤しながら未知の課題に対応していくことが、よりよく課題を解決する姿である。そのことが人や社会、自然との関わりにおいて、学んだことを現在および将来の自己の生き方を考えることにつながる。

そのような学びを繰り返す中で、常に対象を自分との関わりで見つめ、問い掛けながら自分の生き方を考える子供を目指していきたい。

(2) 子供理解の原則に立つ

「子供理解の原則に立つ」ために、3つのことを大切にしたい。

まず、教師が子供をかけがえのない一人一人の人として認め、「自分の力で伸びていこう」と大きな可能性を認めている存在であるという子供観をもつことである。次に、子供にとって学びのある、子供の思いや願いを大切にすること、教師が子供をかけがえのない一人一人の人として認め、「自分の力で伸びていこう」と大きな可能性を認めている存在であるという子供観をもつことである。次に、子供にとって学びのある、子供の思いや願いを大切にすること、教師が子供をかけがえのない一人一人の人として認め、「自分の力で伸びていこう」と大きな可能性を認めている存在であるという子供観をもつことである。そして、一人一人の子供の発言や行動の意味とその背景、その子供の人となりや肯定的に見取り、認め付けながらその子への適切な支援を探ることである。そうすることで、子供は

自分の課題を解決するために学習に責任をもつようになり、さらには学習をやり遂げたときの達成感を感じたりすることができるようになる。

「先生に教えてもらったことばかりやっていては、本当のけん玉の達人にはなれない」と自分で開発した技を奪取り奪われ子供、「難しいことにも挑戦して、大豆に詳しくなりたい」と、大豆を精搾する味加工できるまで、本や近所の豆腐屋での取材を重ねて研究する子供等、活動を進めていくとその子供同士の思いや願いが生まれる。

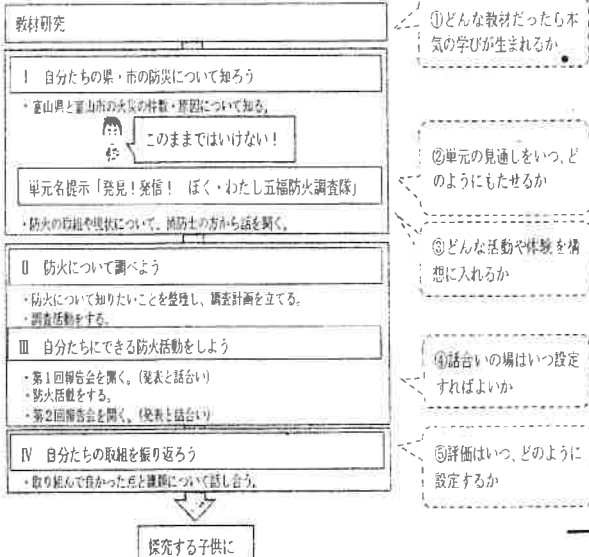
つまり、子供理解の原則に立つとは、単元における子供一人一人の成長を温かく思いやり、思いや願いの実現に向けて支援し続けることであり、子供の確かな学びにつながることを考える。

生活科と総合的な学習の時間のそれぞれの見方・考え方を基に、その子供に**しかたない成長を、単元構想に反映**します。

3 研究内容 (1) 子供が単元と出会う前に教師が考えたいことです。

(1) 本気の学びを生み出す単元構想

本気で学んでいる子供には、次のような姿が見られる。思いや願いを膨らませながら納得のいくまで繰り返し対象と関わる姿、対象に生き生きと動きかけながら主体的に学習活動を繰り返し、切実感をもって自分の課題に向かう姿である。そのような子供は、感情を揺さぶられ、課題の解決に夢中になり没頭したりしている状態にある。このような子供の姿が現れてくる単元を構想するために、次の5点について考えていきたい。



(1)の項目の順番です。

教材の価値
どうしてその対象を教材とするのかを問い直し、見方・考え方に基づき、教材の価値を多様に分析しておくことで、子供の思いや願いを大切にしながら、その子供の学びを捉え、支援をすることができま。そして、単元との出会い後には、子供に学習を委ね、必要な時期に適切な支援をすることができま。同時に、子供の学びを力強く励ますこともできるのではないのでしょうか。

単元構想の工夫
子供が夢中になって対象と関わっていくと、子供の活動は、きつと教科等の枠組みや系統性を超えていくことが想定されます。そのときの子供は、対象を学びたくてやまないのではないのでしょうか。さらに、地域や学校の特色を生かしたカリキュラム・マネジメントを踏まえることで、子供が自分らしさを存分に発揮しながら学ぶことができます。

① 対象がもつ教材の価値を捉える
子供たちが教材と出会うとき、「おや?」「どうして?」「～したい?」「～できるようになりたい」と疑問や課題意識をもつことは、本気の学びが生まれる原点である。このような出会いをするためには、学校や地域の特性、子供の発達段階や先行経験及び、既習経験等の実態をよく理解した上で、対象がもつ多様な価値を多面的に分析し、子供たちが思いや願いを生かし自分事として取り組むことのできる対象を教材化する。その際、「何とかがしやりに逃げたい」と子供が夢中になって取り組まなければならない対象を教材とし、子供たちが力を尽くすことで思いや願いを実現させ、活動の意味を感じ、成果を残すことができる学習課題を設定する。また、地域・出向くなど、教師自身が子供たちと同じ立場で教材研究することが大切である。
単元構想においては、生活科や総合的な学習の時間だけでなく他教科等で身に付けた資質・能力との関連を図って年間指導計画を作成する。その際、各学校で具体化された「知識及び技能(の基礎)」「思考力、判断力、

子供の思いや願いを大切に
単元との出会いの場が子
供への最大の支援のチャン
スとなります。単元との出
会いを契機に、自分の経験
を思い起こし、不安を併せ
もちながらも対象に心を寄
せていくことでしよう。思
いや願いがもてるような学
習対象との出会いの場を考
えます。また、子供の疑問や
関心を大切に人、もの、
ことに直接触れることがで
きる体験活動を設定するこ
とも考えます。

教材の価値にせまる話合い
・単元の始まりの時期
・一人一人の取組が際立っ
てきてから
・単元の終末・季節の変化
・動物や植物の成長 等
「考えるための技法」を
大切に、単元のねらい
や教材の価値に次第に迫
ることができる話合いを事前
に想定します。

自己評価
自己評価の蓄積や仲間か
らの評価等を行うことで、
自分の成長に気付くことを
促します。自己評価の際に
は、一斉に行う場合を始め、
一人一人の活動は多岐に渡
っているため、その子供の
各活動において、適切な評
価方法を用いたり、時期を
自分で選ばせたりするな
ど、個に応じた行いも考
えられます。

新学習指導要領における、
「学習評価」の在り方につ
いて、部会として今後も研究
を進めていきましょう。

表現力等(基礎)「学びに向かう力、人間性等」の三つの資質・能力が、どのように育まれていくのかも想
定して評価規準を作成し、単元全体を見通して考えることが必要である。また、地域を保護者、外部の専門家、
ICT活用等の人的・物的な体制を確保したり、他学年との関連を意識して系統的に単元計画を立てたりするな
どのカリキュラム・マネジメントに努めていく。

大切にしたいキーワード

④ 単元の見直しを子供と共有する
子供と見直しを共有することで、自当てをもちたり活動の意味を捉えたりしながら活動を展開していくことが
大切である。

単元との出会いの場では、子供自身が「やってみたい」「できそうだ」「解法したい」という意欲をもち、これ
からの学習を見通し、いつも単元名に立ち返って取り組むことができるよう、単元との出会い方や単元名を工夫
する。また、単元が進んでも、小単元や単元全体の見直しを共有し、子供たち自身が「今、何のために、この活
動をしているのか」を振り返るよう、子供の主体的な活動へとつなげる。

このように単元を振り返ることで、子供は目的意識をもって活動を進めるだけでなく、対象への思いを見つめ
直しながら取り組むことができる。さらに、単元を進めいく中で、子供の探究の様子や思考の流れ等を捉え、
当初作成した年間指導計画や単元計画を、時には子供とともに見直し修正していくことで、より柔軟に子供のせ
いや願いに寄り添って単元を進めることができる。

⑤ 気付きを促す価値ある活動や体験を設定する
子供たちにとって価値ある活動や体験とは、子供たちに気付きが生まれ、その後の活動の原動力となるもの
である。そのような活動や体験を設定するために、まず、子供に育てたい資質・能力、教材の本質、子供の実態
等を考慮し、子供の主体的な活動の広まりや深まり等を十分に想定する。その上で、子供自身が試行錯誤するこ
とを通して、新たなものの見方・考え方、学び方を獲得し、よりよい解決に向けて取り組めるようにすること
が大切である。このような活動や体験を段階的に単元に位置付けることで、子供たちの思いや願いが徐々に大き
くなり、単元で目指す子供の姿や単元の流れ、子供が獲得していく力を養いたい態度がより具体的な。

⑥ 単元のねらいと価値ある活動を設定する
単元のねらいや教材の価値にせまる話合いを設定することが大切である。

例えば、生活科であれば一人一人の気付きを共有する場面で話合いの場を設ける。活動や体験の後にそれを振り返
り共有する場を設定することで、新たな気付きが生まれ、互いの考えを聞いて自分の考えを再構築したりし、
気付きの質を高めることができる。また、総合的な学習の時間であれば、取組に対する捉えや価値観が明確
になってきたときに話合いの場を設定する。その中で子供たちは自らの価値観を見直し、新たな課題を見付
けたりすることができる。また、話合いを繰り返すことで、知識が構造化され生きて働く概念的な知識へと高ま
る。その際「考えるための技法(比較する、具体化する、例示する、多面的に見る、分類する等)」を使って思
考が深まるようにしたい。

⑦ 子供たちが意欲を高め、自分の成長に気付く評価を位置付ける
単元を通して、子供が活動への意欲を高めたり、自分の成長に気付いたりしながら学習を進められるように、
自己評価を大切に。そのため、1つ(毎時間・活動ごと等)、どのように評価(文章・絵・シール・自由
記述等)をするのかを考え、自己評価を累積できるようにする。また、相互評価や他者評価を単元の中で位置付
けるなど、子供たちが自己評価を見直し、成長や課題を知られるようにしたい。そうすることで、学びの意欲
や成長に関心が高まるようすることが大切である。

**(2) 子供が単元と出会ってから教師
が考えたいことです。**

⑧ 一人一人の思いや願いを確かに行う支援
思いや願いを膨らませているときには、子供は、生き生きと主体的に学習活動に取り組む。このような子供たち
の姿を引き出すために、次の2点について考えていきたい。

- ① 子供の学びを捉え、自覚につなげる
子供の確かな学びを支えるためには、育てようとする資質・能力が適切に育まれているかを評価規準をもとに
評価し、支援に生かすことが大切である。
評価にあたっては、教師は、単元におけるその子供の学びはもちろん、既習経験や家庭の状況等の情報を集め、
その子を九と共感的に受け止めながら成長を促すように努める。
一方、子供自身は、それらの成長を自覚していないことも多いため、教師は、子供一人一人が自分の学びを自

覚できるように支援する必要がある。例えば、一人一人の子供の思いや願いに寄り添って対話を繰り返すことや、
活動や体験での思いや学んだことをカード等で言語化して分析・整理しながら振り返る場を設定することで、子
供が自分の学びに気付くようにしていく。単元の中で、学習したことや自分の考えをまとめて発表する時間も、
子供たちが成長を自覚する上で効果があるだろう。

その際、「気付きを促す」「本人や仲間との活動、考えのよさをほめる」「さらなる思考を促す」「気付きを明
らかにし、活動や事象を意味付けたり価値付けたりする」など、教師が整理したりつなげたりする言葉かけや書き
等を工夫して、子供が無自覚だった気付きを自分の中で確認し、それを生かした活動が展開できるように支援
することが大切である。

⑨ 取組を見直し充実させたりする段階的活動を展開する
適切な活動は体験活動を価値付け、自分たち自身で自他の取組のよさに気付いたり、今後の活動の見直しを
もったりする単元のねらいとなる活動である。

⑩ ねらいに迫った子供の具体的な姿を想定し、展開を練る

単元構想を基にしたが目の筋の子供の状況捉え、どんなことに必要感をもっているのか、教
師は何に気付いてほしいのか、子供の具体的な姿で想定しておくことが大切である。その上で、発言者の
取組のよさを併せてほしい思いを捉え、どのように伝えたいか展開を練りたい。

子供たちが自分との「違い」に気付くための共有の場面を大切に

他の子供が相手の気持ちより想像しながら傾けるように、根拠や理由、状況等を引き出す問い返しだ
けでなく、場の再現や価値を確保するなど、発言している子供の意図が伝わるように工夫したい。このよ
うに、話合いを進めていくと、子供は自分と比べ聞き、「違い」に気付く瞬間がある。「違い」とは対
立や反対だけではない。同じ内容の発言をしても、各々がその発言に至るまでの経緯や背景は異なる。
その過程の異なる部分、思いや願い、学習の進め方、学んだこと等の違いに注目して関心することができま
うようにしたい。これらの「違い」が、自らの取組を見直し、改善を促させていき、子供一人一人の学びの
核となる。

⑪ 子供たちが深く考えるための手立てを考える
時には資料の提示や意図的な情報等や子供たちの学びを引き出すことや、子供の発言を促して自分
を捉えることも大切である。その時の子供の表情の変化やつぶやきを捉えることで、話合いを焦点化させ、新
たな課題をもつことができるようにしていきたい。また、その手立てが形式的なものにならないように、
目の前の子供たちに今何が必要か、その場その場で判断していきたい。

活動や体験を通しての気付き、活動の自当てが達成できた喜び、新たなものの見方、新たな課題が生まれた喜び
等を大切に話合いにより、自分のよさや可能性を表現し、「よりよい取組にしていこう」とする意欲を高め
ながら探究する子供を育てたい。

〈生活科 第1学年「ここにフェスティバル」の指導例〉	【教師の見取りと支援】
自分たちのお店がほぼ完成し、2組でお試しをしてみたい、楽しそうだったと手ごたえを感じている。次週 の幼稚園との交流に向けてやることを自分たちなりに考えている子供たちに、2組からの「楽しかった(25 人) 楽しくなかった(7人)」の評価を見る。	
C えーうそ。そんなに楽しそうだったの？①何が面白かった の？な。3組さんに何が面白かったの？聞きたい!	①他者評価を提示することで、自分 たちの活動を振り返り始めている。
T 楽しくなかったわけを知りたい? (資料として楽しくなかった理由を提示、②)	②あえて記録としての他者評価を提 示することで、子供たちはより自 分の活動を見直ししたくなる。
D児 ③誰たちのことか、しれない。(つぶやき)	③これまで満足していたD児にとっ て、改善の必要を感じた様子であ る。⇒他者評価がD児にとっての 新たな視点。
T 面白い。どのところが面白かったの？	④D児のつぶやきから意図的に指名 し、自分の活動を振り返ったの思 いを語らせる。
D児 楽しかったこと、僕たち、釣ってんだけれど、簡単すぎたから 面白くないと思って、楽しかったから・・・そして、女子とか、全然 当たってなかった。	⑤今の気持ちを聞くことで、見直し を促す。
T ⑥それで、今、どうしようと思ってるの?	
D児 簡単なコースも作ろうかな。でも、グループのみんなで相談した い。相談して、どうしたら喜んでもらえるか、考えたい。	
C 私たちもグループで相談したい。	

無自覚→気付きの自覚
目の前の子供の歩みを大切に
し、評価規準を基にして個に応
じた支援を行います。その際、振
り返りの言葉から子供の実態を
捉えるだけではなく、日記や行
動等からも、その子供の学びを
最大限に紡ぎ、その子供との信
頼関係に基づいた支援をしま
す。

大切にしたいキーワード

表現し考える場の工夫
(生活科)
気付きや発見を表現する
↓
・自分の考えの捉え直し
・気付きの自覚
総合的な学習の時間
相手意識や目的意識を明確
にして仲間へ伝える

子供たちが目的に応じた表現
方法を選択できるようにしまし
よう。
例 言葉、絵、写真、プレゼン等

子供理解と仲間理解
〈教師の想定〉
・発言者の活動の具体と思いの
よさを捉える
・どう聞く仲間なのか。
・どのような創造的な雰囲気か
・どんな学びが描けるか 等

いざ、授業が始まると、
想定と異なることも...

〈実際の子供の姿〉
○仲間のよさを学び合う
○発言者自身は自分をつめる

一人一人の子供の「確かな学
び」を大切にできる、そのような学
習になることを願っています。